

福澤諭吉（眞山青果）

眞山青果の戯曲である。明治政府成立から間もない明治三年秋、攘夷の風潮は尙も根強く、「洋學先生」の遭難が相次ぎ、前年には横井小楠大村益次郎が暗殺され、福澤諭吉も襲撃の危険を絶えず身邊に感じてゐた。舞臺は大阪の中津藩藏屋敷。福澤は郷里中津から東上の途次滞在してゐたのだが、そこにも熱烈な「攘夷青年」達がゐた。その一人で、水戸學崇拜者の朝吹鐵之助は心中密かに福澤暗殺の機會を狙つてゐて、或時、やはり福澤を狙ふ國學者の増田榮太郎に云ふ。「憎いのはあの議論だなア。あいつが日本封建の思想を嘲り、武士道を輕侮し、君臣の大義を經濟力にて論じ、主従の情誼を、與ふると受けるとの財力關係にて論じ、あれも舊弊、これも時代おくれと……あの鋭い毒舌をもつて論じ詰められると、おれは、クラクラッと、頭に血が逆流して、全く一尺さきが見えなくなるほど腹が立つんだ」。

さういふ朝吹だから、當時の「流行物」の牛鍋なんぞは忌み嫌ひ、「福澤に牛肉を食ふやう勸

められても、お伊勢参りもまだなのに「四足よあしの穢けがれを身に受けるに忍びない」などと眞顔で答へる。すると福澤は、文明開化の「流行物」に易々と流される日本人の輕佻浮薄やの種々相を擲ゆしつ、かう語る。

次には、人に誇りたいために牛肉を食ふやつがある。ビールを飲み、ビフテキを食ひ、頸にハンカチを巻いて、ステッキをつけて歩けば、それで自分の人間が完成されたと考へる奴がある。舊習慣を捨てることに何等の苦勞なく、すぐもう牛肉を食へば文明人だと心得てゐる淺薄なるやつがある。實に、こいつに困りますよ。はゝはゝゝ。處が、わしの塾にも、段々それが殖えるのです。國家のために、時々心が……寒くなります。舊い文明を持たぬ處に、決して新しい文明は發育しません。捨てるべく苦しむ舊い文明を持つてゐるといふことが、わが日本人の向上一路です。

「向上一路」とは「最上至極の一大事」（小學館國語大辭典）といふ事だが、「福澤は續けて、「煩悶なくして牛肉を食ふやつに、私は、將來の日本國を托し得ないとさへ考へてゐる」と云

ふのだが、青果の描く福澤は、「福澤諭吉といふ人物の本質をよく傳へてゐると思ふ。「門閥制度は親の仇でござる」と云つた福澤は、同時に、「瘦我慢」の大事を説いて、「舊習慣」に従ふ生き方の見事を讀へる男でもあつた。この作品でも、朝吹も増田も福澤の孝心の美しさに打たれて暗殺を斷念する。それは詰り、嘗ての日本人は洋學先生も攘夷青年も共に鷗外の云ふ「尊きもの」、即ち「捨てるべく苦しむ舊い文明を持つて」ゐたといふ事に他ならない。

先般のアルジェリア人質事件の際、キャメロン英國首相は「對テロ戦には何十年も掛るだらう」と語つた。十二年前の同時多發テロの際にも、やはり英國の著名な歴史家マイケル・ハワードは「長期戦か」なる一文を書き、近代文明の基盤たる啓蒙思想が傳統的社會に齎した衝撃は、「確乎たるものの全てが雲散霧消し、神聖なるものの全てが冒瀆されてゐる」といふマルクスの言葉に巧みに表現されてゐて、さういふ傳統的價値の蹂躪への激しい憎惡は、その儘現代のイスラム過激派の行動の大きな原因をも成してをり、近代文明の諸價値を保ち守らうとするならば、對テロ戦は米國のみの戦争ではなく「吾々全ての戦争」だとの覺悟を固めねばならぬと論じた。今の吾國には福澤も朝吹もゐないが、米國の「同盟國」らしい日本は何を保ち守らうとしてゐるのであらうか。

(眞山青果全集第八卷、講談社)